

こんにちは！歴史資料室の鈴木です。

以前に、青森市で戦前から昭和30年代頃までつくられた「パニクラパイプ」（県内特産の根曲がり竹の根を利用した工芸品）についてご紹介しました（2013年7月19日配信 第66号）。今回は、それを考案したかたについてご紹介したいと思います。

明治21年（1888）に上北郡百石町（現おいらせ町）^{ももいし}に生まれた西館弥輔は、明治43年3月に青森県師範学校を卒業し小学校教員となりました。その後、文部省の中等学校教員の手工科検定に合格し、大正8年（1919）からは青森県師範学校に手工の教諭として勤務しました。手工とは、現在の図工の工作や技術家庭科に相当します。『青森師範学校志』（弘前大学出版会 2006年）によれば、教師としての西館は、コツコツ仕事にはげむ職人肌だが、ガンコさや片意地とは無縁で、生徒のオリジナリティを尊重する温厚な紳士だったそうです。

また手工の教師をしながら、西館は青森の新しい工芸品として、根曲り竹を利用したパニクラパイプを考案しました。そして、パニクラパイプは満州事変に従軍した戦傷病兵の授産事業としても製作され、西館はその指導にも関わっています。



パニクラパイプ
（青森市経済部商工課
『あおもり』1961年、
歴史資料室蔵）

昭和8年（1933）7月、満州事変に従軍した第八師団の兵士たちが青森県内に戻って来ることになりました。その中には戦闘で負傷した者も多く、師団では彼らの除隊後の生活が成り立つように養鶏や養蜂のほか工芸品の製作などを各衛戍病院（陸軍の病院）^{えいじゅ}で学ばせることにしました。

昭和9年版『東奥年鑑』によれば、青森衛戍病院の入院患者に対し、まず昭和8年7月15日からパニクラパイプと絵馬の製作指導が始まりました。さらには、あけびつる細工、籐家具、くるみパイプなども製作するようになり、西館はこれらの指導にもあたりました。

同年10月には、パニクラパイプは商工省貿易局の審査で輸出品として合格し、パリで開かれる日本工芸品展示陳列会に出品されることになりました。西館はこの海外進出を喜び、また、パイプがどんどん売れば、竹の根を掘ることが山麓の人たちの良い副業になって一挙両得になることも期待しました。

その後、昭和9年発行の『青森商工案内』（青森市役所発行）には、パニクラパイプが「各地より注文殺到」「遠く海外に輸出せられてゐる」とあるので、工芸品として人気が出たようです。また、昭和12年には、県観光協会推奨の土産物にも選ばれました。しかし、時代はすでに戦争へと突き進んでおり、やがて海外輸出どころではなくなってしまったのではないかと思います。

退職後、西館は百石町に戻り、初めての公選町長として昭和22年4月から1期を務め、同28年からは同町の教育長も務めました。

※今回は『青森県人名事典』（東奥日報社 1969年）、『百石町誌』（百石町 1985年）等を参考にしました。